



石原都知事からす対策にご執心

からすのことは からすに聞けば？

第5巻第6号
通巻第54号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社
からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

御存知のように雨嫌いの私である。季節は梅雨。何とはなしに気が滅入る。知人から、連日の雨を眺めていたら鬱が酷くなった、何か良い薬はないか、などと、嘆きのメールが入ったり。そんな文面を眺めていたら、こちらの気分の方が陰々滅々。なかなかに達する瀧ない。雨が嫌いだ、寒いのも嫌だ、と年がら年中文句を垂れ流している私ではある。しかしながら、いつでもシャツ一枚で過ごせるようなぬくぬくとした気温で、雨など滅多に降りはないというような、例えば、ロサンゼルスのごとき街が羨ましいかと言えば、そんなことはない。なぜか。寒暖晴雨、気候の移ろいがあるがゆえに、日本には日本的な美意識が育つ。のだから。雨嫌いの、冬嫌いの私自身、衣替えのない真つ平な環境など真つ平御免。生温い陽気に包まれて、ずるずるたらたらと過す快楽よりも、何だかんだと不平を漏らしながら、朝な夕なに空を見上げ、出勤前には天気予報欄に目を通すような日々の方が好きなのである。

燥ぎ回れぬでぶ猫は奇ついた面持ちで腕を丸め、外を眺めてぶつくさ。やがて堪え切れずに飛び出していったら、びしょ濡れで戻る。以前は、雨が降ると埃が洗い流されるかのように感じていたものだが、近頃では化学物質のせいで、ますます町が汚れていくようにも思える雨の景。

それでも、雨には雨の美しさがある。

雲一つない真つ青な空を背景に跳ね返る光に目も眩むような緑もいけれど、雲の切れ間さえ不分明な淀んだ空と光よりも闇に近づいたような木叢の暗緑の組み合わせが魅力的に見えることもある。

どんなものも、ただひとつの顔を持っていくわけではない。同じ空、同じ木々、同じ町、同じ人、ちょっとしたタイミングや状況の違いで、随分と異なる表情を見せるもの。気が触れているとしか思えないミスタ・ブッシュも、アメリカンカントリー・ホームに帰れば、赤ら顔の気のいいダッドに過ぎないのかもしれない。やたらと踏ん返り返ってはいるものの、

(最終面に続く)

今日の紙面から
四面からすライブラリーに
カルチャーコーナー新登場
本、映画、音楽を中心に紹介してきたからすライブラリーが、今回さらに幅を広げて、脈々と生き続けていたおまけフィギアの世界を通して日本文化を斬る。

からす新聞は××××が母体となって、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。
誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

松本と話そう
ピンポンパン

きのう、久々に晴天だった。気温も三〇度を超えた。そんで、海へ出た。過ぎ去った台風の影響ですこい波。サーファーたちは喜々としてそれに挑んでいる。非サーファーの自分は薄い胸板でそれを受けて遊ぶ。が、やはり強力。ちよつと高い波が来たら完全に碎かれ持っていられるだろう。身体じゅうの湿気を洗い落としたあと浜に上がる。そして横になり、すべてその場に任す。

夏至を翌日に控えた太陽は潮騒というBGMに支えられて画面の真ん中で踊る。フラメンコのように。光線がダンサーの手のひらのように舞う。が、どことなく悲しげ。生命力は常に死に歯向い、そしてかならず負けて死へと向かう。そう、だから太陽は自分にとっては悲しさの代名詞である。もちろん、太陽が主役となる夏も。

そういえばサザンは自分の住んでいる藤沢の隣の茅ヶ崎の代名詞であり、夏の代名詞でもある。が、ファンでなくとも気付いているだろう。キーワードは、「涙」。例えば、デビュー曲『勝手にシンドバット』では、それにしても涙が止まらないだろうしよつ。」とあり、この間まで最新

で最大のヒット曲『TSUNAMI』では、「人は涙見せずに大人になれない。」とある。

そうこうしていると太陽が画面の右へと移動していた。海にはいつのまにかオレンジ色がやや溶け込み始めている。身体も熱い。咽も乾く。その場をあとにした。

ビールを求めて近場のスーパーへ入る。すると鈴虫の音だ。去年もそうだった。もう鈴虫なのだ。

彼らは夏が始まると同時に秋も始まっているのだ。始まると同時に終わっているのだ。単なるこのスーパーの商業上のことなのか、あるいは夏の町とされる湘南の人々は、サザンの歌の世界のように夏には刹那さを感じているのだろうか。

家へ戻り、ビールの蓋を開け、テレビを付けて流す。すると画面に久しぶりに活動再開したサザンの姿。JAL「夏の沖縄」のキャンペーンでのCM起用のようである。やっぱり、我が家は気持ちいいよつで桑田は異様にはしゃいでいる。そして自ら、スチュワートだの、乗客だのに扮して自虐的にそのコメディイ仕立ての役を演じる。嬉しさとその切なさが痛いほどに伝わって来た。

実は桑田佳佑が今の日本の音楽シーンで最もお気に入りです。

借金取り立て代行いたします

ストーカー バスター

produced by

P.D.Agency

tora@pda.co.jp

1843 N. Cherokee AVE: APT. #216

Los Angeles: CA 90028, USA

voice : +1-310-493-1001

facsimile : +1-323-466-5645

Rei's Gallery



トリコロール

ある切っ掛けで、インディーズミュージシャンの写真撮影をしているのですが、今回はその時に撮った写真です。普段自分の作品として一人でカメラをもち歩いている時とは違った雰囲気を感じた。

そのミュージシャンとふらふら歩きながら気に入った場所で撮影したのですが、たぶん私一人だったら見のがしてしまうような景色を発見出来て、他人の感性と自分の感性を融合させる作品作りでした。

CHICAGO

～明るい自閉症の女性達

監督ロブ・マーシャル

2002年、アメリカ



梅雨でうつうつとした気分を吹き飛ばしたい、と思い、『シカゴ』を観に行った。これは、ミュージカルが終始ちりばめられた映画だ。キャサリン・ゼタ・ジョーンズのダンスは目を見張るほど迫力があるし、リチャード・ギアのタップ・ダンスなんて、この映画以外では見られないかもしれない。

物語は、シカゴの売れない踊り子達が、自ら犯した殺人事件を利用して、大スターにのし上がるというメチャクチャな話だ。出てくる人たちは、全員自分のことしか考えていないが、それぞれ成功を収めている。普段から「人のために・・・」と説かれている私たちには、痛快なサクセス・ストーリーだろう。

心が雨が曇りの女性は、これを観ると元気になるかもしれない。それに対して、元気がない男性は、余計に落ち込むかもしれない。なぜって、この映画では、いかに女性が逞しくて男性がバカかってことを、嫌というほど見せつけられるからだ。では、私はどうだったかというところ、どうしてか元気になった。

(高橋)



雲ノ箱

外間 隆史

Gemmatika Records、2003年、

RSCG1020



CDs

写真・掌篇・往復書簡などを載せたブックレットとCDの組み合わせが、この『雲ノ箱』という作品、彼の表現形式の多様化を象徴するように……と書きたいところだが、実像は些か異なる。もともと彼の表現形式はメロディーや歌詞という世界に閉じこもったものなどではなかったのだ。彼の組み上げてきたものは、どういう形であれ、ひとつの閉じた世界であつたし、これからそれは変わらないだろう。毎回、ひとつの小さな宇宙というパッケージが私たちの眼前に提示される。森の出口は次の世界への入り口となつて。



そうそう、次作では映像もお忘れなく。

(全太)



Culture

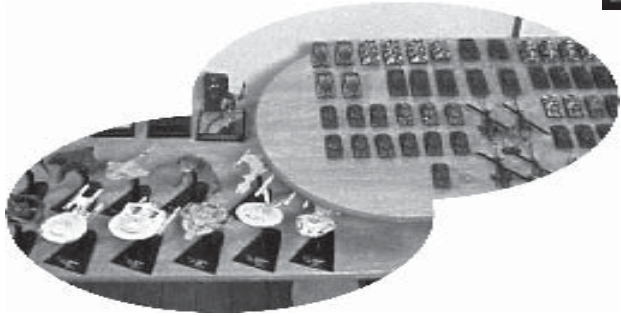
痛い所をつかれています
古くはケロッグ社のコーンフレークに付いていた世界の名機シリーズ。リンドバークが大西洋を横断した飛行機やレーシングカーのプラモデル、今で言うフィギアのおまけは昔から脈々と生き続けていた。

ここ二十年程の間セブンイレブンを皮切りにコンビニエンスストアの大全盛時代を迎えている。このコンビニエンス産業のマーケットは十七兆円産業とも言われている。当然ながらメーカー各社は消費者へ接点としてコンビニをターゲットにするのは当然だろう。そんなメーカーの思惑の一つにおまけ菓子急増している。おまけ付きとは控えめな言い方であり、実際はおまけメインに申し訳程度の菓子の付いたもの。そのおまけがフィギアなのだ。価格帯は一個二百五十円前後。中国製とはいえ、昨今の精密製造技術の賜物とも言えるほど良く出来たフィギアなのだ。それもそのはず、元々玩具メーカーの

トミーやタカラまでもがフィギアに少量のラムネやガムを付けた菓子をコンビニに置いて販売している。

さらに憎い演出として、一シリーズを大体五種から十種ぐらいにして、さらに「シークレット」と言われるカタログには出ていないものを一種類加えていたりもする。小中学生にとつての二百五十円がどのくらいの価値かは既に定かではないが、三十路を過ぎたものにはつい過ちで買ってしまえる価格なのだ。それもいわゆる大人買いで、かく言う自分もかなり痛い所をつかれ、十種プラスシークレット一種のシリーズを三十三個買い、カラーバリエーションも含めると二十一種になるシリーズは六四個も買った。最後に一種類が揃っていなかったりもする……。メーカーさん、参りました。

(小張寅僧)



ろんどん つうしん
London Report

ダンボール

最近身の回りで、色々な変化が起きているように感じる。これは特に良い事、悪い事と言った類いのものではなく、本当に純粋に何かが変わると言ったもの。小さなことから大きなことまで色々あるのだが、一番大きな変化の一つは引越。一年以上も住んでいたキングズブクロスの家からとつとつ引越すことになった。実はまだ新しい家探しの真っ最中なのだが、少し感慨深いものがある。引越しのことを考えて部屋の中を見渡してみる。「ずいぶん荷物が増えたもんだ」と、思わず独り言を言ってしまう。思えば、

ホームステイから始まり、ずいぶん引越をした。日本で引越をした回数よりもその数が多い。それでも、元々は一年間の語学留学だけのつもりだったので、引越をするたびに、と言つよりも今のフラットに住み始める前までは、荷物が増えることはあんまり無かった。僕にとっていつか、それもそう遠くない未来に日本に帰る事は当たり前だったし、長い目で見たイギリスでの自分のこれからを考えるよりは、日本に帰った後のことを考える事の方が自然だったからだろう。

それが学校が変わった所為もあるのか、自分でも気が付かないうちに、今のフラットに引越して来てからは少し意識が変わってきていたように思う。日本に帰る時のことや、引越しのことを考えて、荷物を余り増やさないようにしよう、と言つ意識はあまり強くなり、イギリスでのこれからの考えることも少しづつ増

えてきた。やっぱり、自分は日本からここに留学しに来ているんだ」と言つ意識は変わっていないのだが、専門学校から美大に編入し、後三年はここに居る事が決まった時点で、あんまりそんな事を考えなくなつた。そんな事だから、荷物が増えていったのも多分ごく自然なことなんだろう。朝起きて、新しいフラットを探すためにインターネットの広告を見て電話をかける。電話を切つた後で、部屋の中を見渡して始めて、いつの間にか増えた持ち物に気が付いたのだ。その日は、もうほとんど学校でやる事は無いのだが学校に行つた。作業をして、オフィスを除くと担任がいたので少し話をした。夏休み明け(二年目)はいつから始まるのか、何か日本から買ってこようか? とかそんな話をして、「じゃあまた、夏休み明けに」と言つてオフィスを出た。すぐに帰つても良かったのだが、何となくいつもの習慣で自動販売機でペ

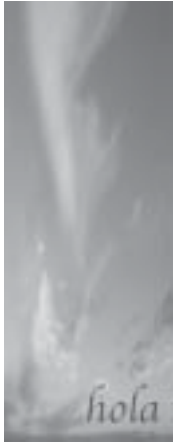
プシを買い、中庭へ行きタバコを吸つた。すっかり季節も夏になり気持ちがいい。もう学期は終わっているのだから、人も少なく、いつもよりも静かだ。決して綺麗な中庭ではなく、どちらかと言つと校舎と校舎の狭間のスペースといった感じの所だが、何故か落ち着き、物を考えるのにはちょうどいい。ポーツと学校でのこの一年間を振り返つたりしていた。

学校を出てバス停に向かう途中に、良く晴れた空に浮かぶ白い雲に気が付いた。日本のそれとは少し違つがやっぱり夏の雲だった。何故だか嬉しくなつてしまふ。バスの二階へ駆け上がり腰を下ろす。三回目の夏が来る。バスは走り出した。僕はその時、一年生が終わつたことと同時に、今までのイギリス生活が、色々な物が新しく、新鮮な経験ばかりだったイギリス生活が終わつたのを、通い慣れた道を行くバスに揺られながら感じていた。英語に慣れたからか?

テレビを買つたからか? 小切手の切り方を覚えたからなのか? イギリス人の友達が出来たからなのか? とにかくそんな、今までは違つた生活が始まるような気がしていた。今ではこの国でやってみたい事では無く、この国でやって行きたい事もある。いつか、そう遠くない未来に日本に帰るといつた意識はほとんど無くなつていた。「やっぱり日本は僕の国だ」そんな事を思いながら、今の生活がこの国にある事を自覚した。始めたばかりの引越しの準備、部屋のすみにあるダンボール箱を思い出す。テムズ川を渡る橋の上をバスが通り過ぎた時に、余り開かない窓から心地よい風が吹いた。

(神山朝人)





六月、梅雨。夏でもなく春でもない小休止の季節。植物は養分を蓄える。七月も末になつてよつやく、太平洋高気圧とともに、蒸し暑い夏がやって来る。入道雲にかき氷。

二月が光の月だと聞いたことがある。果たして今までそのように感じたことはなかったが、今年わかつた。十二月が冬至だから、それから二ヶ月過ぎれば、計算上は十月の末と同じ日差しがふりそいでいるはずだから、当然といえばそうかもしれない。

六月は、夏至だから、昼が一番長い明るい季節なのに、停滞した前線のせいで厚い雲に覆われて、とつていそのような実感は持たなかった。私たちの生活は、このような気象条件を基盤にした風土のなかにある。雨雲が邪魔をしなれば、本当ならば、まだ地面が暖められていないだけ、暑すぎることなく、日射の多い日の沈まない季節を楽しめるのだろう。そんな風土にヨーロッパの生活はある。

五月は、華やかな夏の季節のはじまりなのだ。今では少し時期がずれたが、モナコのグランプリからカンヌの映画祭、ローランギャロスにル・マン耐久レース、そしてウインブルドンと、誰もが知る大きなイベントが次から次へと開催され、眩しいくらいのがやきの中で、五月と六月が過ぎてゆく。七月になると、もう皆きつと疲れてしまうのだらう、イベントではなく、ゆつくりと過ごすバカンスのシーズンになるのだ。

我々にとつての夏は、毎年決まったように七月と八月なのだが、彼らにとつては、既にその前に夏は始まっている、どころか、既に一段落しているようなものだ。六月の下旬が夏至ならば、その前後を対照に、ひかり

を楽しむための夏があつても道理と言える。そして九月は、夏の整理体操のためのひと月であり、十月になつてよつやく秋となる。実に、一年の半分は、明るい陽のもとに自然とふれあい、屋外での時間を大切にする。もっとも残りの半年は、暗く陰つつな毎日であるともいえるのだが。

スペインでは、六月になると、人びとは朝の八時から働き午後の三時で仕事を終える。このペースは、八月まで続き、場合によっては九月にまで持ち越しになるらしい。サマータイムとは別の、社会の決まりである。夜十時を過ぎてよつやく暗くなり始めるのだから、三時に仕事を終えたとすると、延々七時間、太陽の恵みをうけて、海水浴やプール、スポーツなどを、友人や家族とともに、好きなことをする時間がある。この時期飛行機に乗れば、きれいに日焼けにしたスチュワードレスが迎えてくれる。皆仕事をしながら自由に時間を使い、エネルギーを充填しているようだ。

昼食は、夏時間での仕事が終わつたあと、三時過ぎから始まる。すると、例えば夜の七時を過ぎて、日本での日常の感覚では高々夕方四時か五時というところである、まだまだ時間はたつぷりあると勘違いしてしまう。十時まで明るければ、それまで働いてしまつのは建築のひとつだから、なのだろうか。スペイン人の建築家である彼らも、建築家は違つ人種だと言つた。大学で教えている彼らは、進路を迷う学生に対してよく考えるように言つたらしい。曰く、建築家となるために多くの失うものがあるから、と。太陽や潮風、緑や、もしかすると友達さえ失うと言つたのだろうか。我々の目には、彼らとて、とても豊かな時間ともいえるように見えるのだが。

夜の十一時、近所のレストランに出かけてゆくと、道に張出したテラスで、彼らの友人に会う。おお久しぶり。やあ息子さんはちよつと見ない間に、大人っぽくなつたね、何歳になつ

た、という、他愛もない会話が交わされる。近所の井戸端会議のような光景は、高円寺のガード下で店の外までみ出しているテーブルで、仲間が盛り上がりつつある光景と同じことなのだ。こちらのテラスでは、高校生や中学生の娘

や息子が両親と一緒に食事をしている。こんなふうにして親の友達と会えば、席を立つてこんにちはと挨拶し、ひとしきり話が終わるまで座らない。

(最終面に続く)

PERSPECTIVE



「それ」ってなんだ - that と it

日本人：

Prices have been falling in Japan.

「日本じゃ物価が下がってるんですよ」

デフレでない国の人：

That sounds nice.

「そりゃいいですね」

日本人：

It isn't nice at all.

「ぜんぜん良くないですよ」

デフレでない国の人：

Is that a problem?

「それって問題なんですか？」

日本人：

That is a problem. My pay has been falling, and I have been failing to live a day-to-day life because of it...

「それって問題です。おかげで給料はカコウ、日々の暮らしにも事カコウってんですから・・・」

英語をやり始めたばかりの中学1年の1学期のテストで、よくこんな問題が出される。空欄に入れるべき言葉は何か。

What is this?

「これは何ですか」

() is a book.

「それは本です」

一般に子どもたちは、「this は2回目からはitにかわるのよ」の教えに従って、itを書き入れなければならない。でも、thatも「それ」だったはず。thatって「あれ」と「それ」の両方でしょ？ thatじゃだめなの？

もっともな疑問である。答は、もちろんthatでもよい。いや、むしろthatこそが正解である。なぜなら、itはふつう訳すほどの意味を持たない形式的な代名詞に過ぎないからだ。つまり、itは「それ」ではないとも言えるのだ。

整理しよう。

「それ」は that である。

it は意味が弱く、訳さない。

冒頭の会話では、お互いがthatとitを使い分けているのである。それゆえ、訳語でもthatは「それ」だが、itには何も当てていない。似たような例をもうひとつ紹介しておこう。

エピメテウス：

What is that?

「それなに？」

パンドラ：

That is a secret.

「それは秘密なんです」

エピメテウス：

I wonder what is in that.

「その中なにが入ってるんだろうね」

パンドラ：

I don't know. But that is my treasure.

「知らないの、でもそれは私の宝物なんです」

エピメテウス：

Open it.

「開けてみてよ」

パンドラ：

Of course not! Nobody can touch that.

「もちろんだめ！ だれにもそれは触らせないわ」

このケースでは、エピメテウスは3度目にitにしたが、そのタイミングに何か法則があるわけではない。気分である。一方、パンドラのほうは「わたしの宝物はitと呼べるような軽々しいものじゃない」と言わんがごとく「それ(that)」に固執している。

さて、ここまでは、前出のthatをitで受けるか、thatを使い続けるかという話だったが、少し視点を変えよう。御存知と思うが、これら両者は、thisやthatだけでなく、あらゆる前出の単語や内容などを受けることができる。でも、だからといって、これまで述べてきたことに変わりがあるわけではない。

ペリー提督：

We would like you to accept this message from our President.

「あなた方に、このわが大統領からの親書を受け取っていただきたいのです」

幕府の役人：

We cannot accept it.

We cannot accept that.

it = that = this message from our President。役人は、どちらを言うべきか。もちろんどっちだっていい。意味的にも大差はないわけだが、そのちがいはもうおわかりだろう。

「受け取るわけには参りませぬ」

「それを受け取るわけには参りませぬ」

さらに、もう少し長いものを受けている例も挙げておこう。

男子生徒：

Hey, let's have a peek at the girls taking a bath.

「おい、女風呂のぞきにいこうぜ」

その他の男子：

It sounds nice.

「いいねえ」

That sounds nice.

「そりゃいいねえ」

この場合は、it = that = to have a peek at the girls taking a bathである。

以上のように、このitとthatの区別は、われわれ日本人にとってさほど難しいものではない。しかし、「it = それ」が最初に刷り込まれてしまうため、どっちも「それ」になってしまっ、単純なちがいを見失ってしまうのである。(望月)



(六面から続く)

最近、江東区の三菱製鋼工場跡に公園の東雲団地という、集合住宅ができた。このうちの一棟の評はこうだ。既成の住戸の考え方を徹底的に考え直し、古い形式から解き放った。家というひとつのかたまりとしてではなく、目的にあった部屋あるいは機能を、住棟の中に自由に選択し、購入するような自由を考えた。ソーホーの可能性も考えた計画だから、尚更現代の都市住居に対する先鋭性は強くなる。システム化された構造体は、フレキシブルな空間単位を提供するから、そのどの空間を何のために選ぶかは任意となる。

発展して考えれば、廊下は、都市の小路や長屋の路地のような、共有空間として部屋ごとの空間を結びつける役目をしていて、したがって、住棟そのものが、一種の都市そのもののような空間となるのである。実際は、住

都公園はワンルームマンションをつくれないうで、このシステムを完全に具体化することはできなかつたわけだが、新しい住戸の構成の基幹をなす考え方はこれだ。

さて、このような住戸のシステムは、家族というまとまりがずつと強く生きていくスペインのようなどころでは成立するのだろうか。一日の半分を、青空のもとで自由な時間として謳歌し、一年の半分を占める夏を、大らかな自然とともにゆつくりと過ごす。そんな人たちに、都市住居の形式を極限にまで突き詰めて考えるなどということは無用のことのように思えたりもする。人びとの生活や、その人たちが生活している都市というものは、その実どんなものなのか。そしてこれからできる公園が、その人たちにどうやって使われるのだろうか、ということを考えている。

(篠崎健一)

(一面から続く)

杯を交わしてみれば、案外、憎めないやつかもしれないな、ブッシュのおっさんも、なんて思ってみたりして。違う場所、違う時、違う風の吹く夜に出会えば、ブッシュとフセインだって友だちになつたかもしれないな、なんて。

もし、x x だったら……的な、極めて幼稚な考えではあるけれど、そう考えることで、不景気で物騒な世の中に、雲の間から幾許かの光明が零れ落ちて来はしないだろうか。気のせいかな。

もし、アメリカがイラクに爆弾を落とす代わりに、甘ったるいキャンディや野球道具の一式でも投下していたら、世界の有り様は全く違ったものになっていたわけで、例えば、アメリカ兵が背後から頭を撃ち抜かれるようなことはなかつただろうし、毎日新聞の記者

も不発弾で多くの人々を傷つけたりはしなかつただろう。SF的なパラレル・ワールドという考えかたに立てば、今、私たちが生きているこの現実と並行して、ハーシーズのキス・チヨコを頬張ってヨーヨー片手に米兵と楽しく遊んでいるイラクの子どもたちが生きる世界があるかもしれない。

うーむ、虚しい。なぜか。どんな可能性だつて完全に否定することはできないし、人間には現実で不可能なことさえ想像の世界では可能にする能力がある。にもかかわらず、右記のような幻想が虚しいのは、それが、あまりに手遅れであまりに痛々しい現実と、あまりに乖離しているからであろう。そうなのだ。ブッシュが家では気のいい酔っ払いおやじだったとしても、この現実が消えてなくなるわけではない。

万物は多様な相を持ち、時々刻々と変化し

続ける。それを眺める私たちの五感(あるいは六感)も然り。通り過ぎてしまつては、どんな可能性も零ではない。しかし、逆に考えると、既に失われてしまったものは、贖いようがないということもある。仮に、一家庭人としてのブッシュがどんなにまともな人間であつたとしても、世界のあちらこちらで失われた多くの命は取り戻しようがないし、彼の狼藉は歴史から消えることはない。罷り間違つて歴史から消えたとしても、私の心から消えることはない。

うーむ、こんなことを考えて、また鬱々と雨の夜。

この雨はいつかはやむのだからうけれど……。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki, architect

Voice : +81-3-3220-0644
 Facsimile : +81-3-3220-0640;
 e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
 篠崎健一アトリエ

編集後記

からす新聞第五巻第六号(通巻第五四号)、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇三年七月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾



中野区本町2-50-12 ドエル中野201号

03-3379-1451

